

## 反省力のある教師，ない教師

斎藤 栄二 Saito Eiji  
(京都外国語大学)

### 1 反省力

A: 先生，今日は，英語の教え方についての連載シリーズの題名とも思われないタイトルですね。何か訳でもあるのですか？

斎藤 私は，このところ数年間，先生方の授業を見せてもらうことが多くなってきました。授業の後には必ず研究会をやり，見せていただいた授業の改善について研究会参加の先生方とディスカッションしたり，私の方からアドバイスを差し上げたりしています。私の役割は「授業改善カウンセラー」のようなものになってきていますね。

A: それは，本日の題名と何か関係があるんですか？

斎藤 あるんですよ。同じ先生の授業を1年か2年後に見せてもらうこともあるんです。そこで感じることは，前に見せていただいた1回目と後で見せていただいた2回目の授業を比べてみると，「さっぱり変わってないな」という先生と「よくぞこまめでレベルアップされたな」という先生の二つに分けることができるんですね。この分け方は，やや単純な分け方かもしれませんが。

A: そういうことですか。そうすると私にも興味が出てきました。私だって自分の授業の改善はしたいですから。そこで伺いたいのは，良い方に変わる先生はどうして変わるのでしょうか？

斎藤 キーポイントは「反省力」ですね。

### 2 人間力が教師の進歩に関係する

斎藤 「自分の授業を良い方向に変えられる先生」というのは，「自分の授業を客観的に眺めることができる先生」と言ってよいでしょう。そのときに必要なのは，自分の欠点を改善していこうという意味での「反省力」があるかないかなのです。反省力

のある先生は何よりも心が柔軟なのです。みんな大人ですからプライドもあり，人の前で自分の授業の弱いところなどを指摘されると，どうしてもなんとか防御しようとするですね。私も若い頃はそうでしたし，今でもそういうところはありますから。でも一人になって周りに誰もいなくなると，言われたことを検討しようとしてみる心が静かに頭をもたげてくる。こういう人が伸びると思います。

この反対にいく可能性のある教師は「あの野郎，言いたいこと言って帰りやがった。そんなこと言うなら自分でやってみろ！」などと考えがちで，腹を立てている。もちろんアドバイスの仕方にも問題がありますが，こういう人はどちらかというところ進歩しないんですね。進歩する土台となる力，これを私は「反省力」と呼んでいるんですが，「反省力は進歩するための起動力」ですよ。

A: なんだかこの頃先生の話は，人生訓みたいになってきましたね。英語の授業の教え方を考えるときに，こういう話を持ち込むのは意図的ですか？

斎藤 意図的です。この連載は，どちらかというところ若い先生を頭においています。だから，教師としてのスタート地点に立っている先生方にこういう話をしたいんですね。私はもう40年以上英語教育の世界に身を置いています。そこで感じたことは授業のレベルアップを考えるときに，その土台に人間力があるということです。その人間力の重要な部分に「反省力」がある。私は皆さんに，より良い英語教師になってほしいと願っていますが，英語の指導技術だけをやっていただけではちががあかないということです。そのことに気が付いてきています。

教え方

人間力

A: たしかにそうですね。それは感じています。

齋藤 だから根本的には、心の問題にも自然に触れるようになってきたんですよ。いろいろ経験してきましたから。

A: どんな経験でした?

齋藤 え? ツッコミが鋭いですね。たとえば教師になって1年目の経験で、こんなこともありました。山の中の小学校に赴任したのですが、授業を良くしようという雰囲気はあまりありませんでしたね。それであるとき思い切って「皆さんで時々授業を見せ合って話し合いをしませんか?」と言ってみた。私は新卒1年目で一番若かったのですが、皆さんは「そんならお前がまずやれ」と言いましたね。私はいろいろと工夫して、研究授業をやったのですが、かなり手厳しい批判を受けました。容赦ない感じでしたね。こちらも1年生教師ですから。その後先輩も研究授業の輪に入ってくれるんだとばかり思っていました。誰一人として後に続いた人はいませんでした。先輩の先生方に研究授業を強要する勇気もありませんでした。何か裏切られた気持ちでしたね。私の完全な空振りです。もっとも先輩からすれば「若造が何を生意気な!」と思ったのかもしれない。私としては何十年前の事をまだ覚えているんですから、やはり強烈な経験でした。

A: そうですね。その話は先生から初めて聞きました。今は昔ほど自分の授業を見せるのを嫌がる空気はないと思いますけれどもね。

### 3 学習は個人において成立する。

もう一つ、これから英語教師として経験を積んでいく皆さんには、次のことを授業を創るときの指針に加えてほしいと私は願っています。

「学習は個人において成立する」

具体的な話から始めます。先日、ある小学校に行って授業を見せていただきました。そのクラスの先生は、挨拶の仕方を教えておられました。小学生ですから、先生の後について生徒たちは“Hello! How do you do?”といった挨拶の定型の文を大きな声でリピートしていました。頃合いを見計らってその先生は、「今日は、教室の後ろの方にたくさんお客

さんが来てますね。今からお客さんの所に行って、勉強した挨拶をしてきてごらん!」と言われました。私のところにも、男の子が一人やってきました。私に向かって“Hello!”と言うので、私もにこにこしながら“Hello!”と返しました。ところでその後彼の口から出てきた言葉は「えーと、なんだっけなあ?」でした。つまり教師の後でリピートしていたときには、元気もあるし、できているように見えるんです。しかし一人になったときには、この生徒は「なんだっけなあ?」です。定着していない。先生のモデルの後すぐにみんなでリピートできるということ、それを一人になったとき誰かに向かって言えるということの間にはまだ距離があるんですよ。そのことに気が付いておられない英語の先生は結構多いですね。考えてみてください。実際の状況のなかで、複数人間がコーラスで“Hello!”とか“How do you do?”とかやりますか。やったとしたら笑い話ですよ。コミュニケーションは基本的には一対一です。そのことに気が付き、そのための手立てを授業の中で準備する。そこで初めて生徒の力は伸びる。コーラスのレベルでいつまでもぐるぐる回りをしていたのでは、授業においては、そのクラスの学力は伸びていませんね。

A: そうですね。でも先生、どうすればいいんですか?

齋藤 一つだけ suggestion です。コーラス・リピーティングの例で言いますと、

(コーラス) → (A君) → (コーラス) → (B君)  
→ (コーラス) → (C君)

上の図のように、全体コーラスの間に、一人ずつリピートさせてみてください。これを教え方の中で習慣化しただけで、随分の違いが出ます。生徒の方からすれば、全体コーラスの間に、必ず誰か一人でリピートしなければならない場面に置かれることになります。それは自分であるかもしれない。これは生徒にとってなかなかのプレッシャーです。

(結論) 生徒に知的プレッシャーを与えておかないで、どうして生徒の力を伸ばすことができるんですか。

英語教師の皆さん是非頑張ってください。